

提言：世界遺産をめざして

ネットワークによる

「彦根足軽屋敷」博物館構想

江 戸期の建物が比較的多く残っている芹町を対象として、「ネットワークによる彦根足軽屋敷博物館」構想を提案したい。この博物館は一つの建物のなかに足軽組屋敷の模型を再現するという従来型の博物館ではなくて、現地にある本物の足軽組屋敷を回遊する博物館だ。

足軽組屋敷には、さまざまなタイプがある。建物のどの面を道路側に見せるかで、妻型と平型に大別され、また、道路と建物間に前庭を持つか否かで、接道型と前庭型に分かれる。このような様々なタイプの建物の特徴やそこの生活の様子などを事前に学ぶための「まち博物館」と、本物の「足軽組屋敷」、それらを当時の雰囲気の中で繋ぐ「回遊コース」。これらが「ネットワークによる彦根足軽屋敷博物館」の基本要素だ。

即 地的に検討してみよう。芹川に近い場所にあり現在使われていない足軽組屋敷を「まち博物館」として利用し、往時の生活の様子を資料や絵、古写真などで再現する。もちろん、ここは来訪者の休憩所、周辺住民の憩いの場でもあり、ここで交流と歴史の語らいが行われる。

まち博物館のまわりの空地は、持ちこたえられない足軽組屋敷を移築した野外博物館とする。同時に、所有者の許



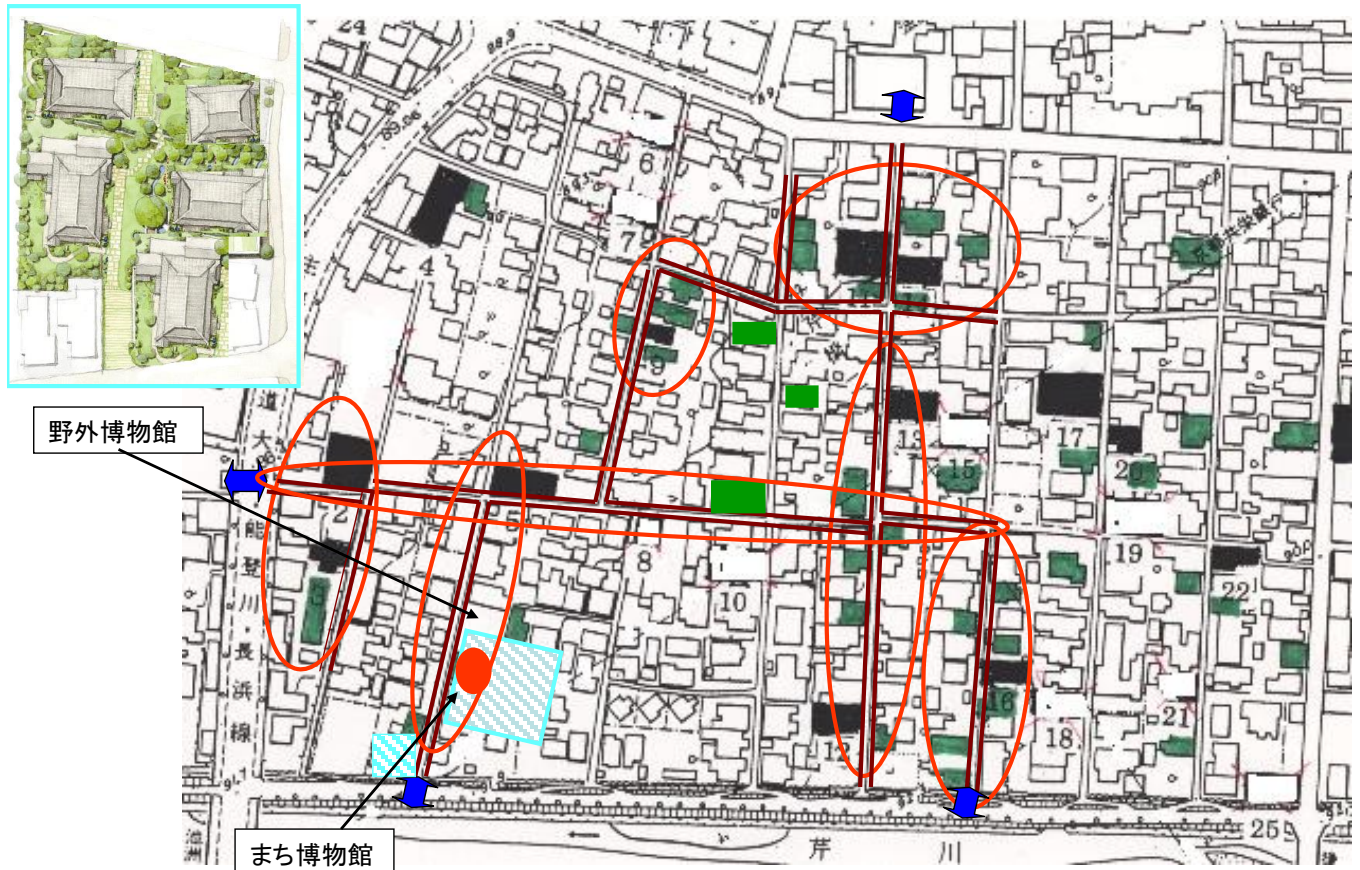
左：現状、右：修景後 ブロック塀に板を貼る、目板塀を設けるなど簡単な工夫で、足軽屋敷町独特の美しい景観がよみがえる。

可を得て公開できる「足軽組屋敷」を複数指定し、これら屋敷の間を木の塀などを設けて景観を整える。そうすると、夢京橋キャスルロードから入って、木の塀を辿って野外博物館に至り、その中のまち博物館で学び・憩い、その上で足軽組屋敷をみて回れる博物館がみごとにできてくる。

この構想を実現するためには、地元の人々の賛同が不可欠であり、また、公開してもいいという建物所有者にネットワークを組んでもらう必要がある。さらに見学ルールをつくり、見学希望者にそれを守ってもらうことが前提になる。

彦 根は1992年以来世界遺産の暫定リストに載っている。本格登録のためには、城下町の価値を認めもらうことが必要であり、それを最も象徴する足軽屋敷の町並み保存は大変待ち望まれている。是非、構想の実現を図りたいものだ。

ネットワークによる足軽屋敷博物館構想のイメージ



第3回

すまい（すまうということ）と修景

“創造的”という言葉から受ける印象は、強く自己主張をするというふうにとらえられがちです。“個性を生かす”ということが、“他者との差異を明確にする。”というふうに表示される例も多く見られます。しかし私達日本人は、饒舌さのもつ美とは違う簡素さの中にも美を見いだすことができます。随筆家の寿岳章子氏は著書『湖北の光』の中で、彦根のまちなみ（夢京橋界限）について、“このまちなみの静謐さは、時を経てきた誇りに満ちている”と記しています。このことが、このまちを訪れる人々が感じる彦根らしさのひとつなのではないでしょうか。

消去することにより見えてくる個性、すまい手のまちへのやわらかい心遣いや愛情が伝わってくるような景観。付け加



A. 入り込んだ路地の建物と敷地境界までのわずかな場をデザインする。



B. 囲われていた塀を車寄せのために取り払い、玄関前の前栽をまちなみに解放する。



C. さりげない景観のなごりを、新しく作られるものの一部に表現する。



D. 人々にとって、慣れ親しんだ景観を残しながら、新しく創られるものとの調和をはかる。

えることではなく、余分なものを消去することにより、その場の持つ美しさや豊かさが純粹さを増してくる。彦根のまちなみを考えるとき、そんな洗練された情景を思い描いてみてはどうでしょうか。

すまうということは「住んで生活をいとむ。」ということ。単に個の充足感を得る場としてすまいをとらえるのではなく、環境としての“いえ”の在り方そのものが価値を持ち得てこそ“すまう”ということの意味があります。

“家”を建てるときに周辺との調和を考え、まちの修景に関わった例を紹介します。

なおA. B. D. は、『ひこねルネッサンス賞』を、C. は景観形成重点地区内に建つ建物で、市の景観基準に適合したものとして、それぞれ顕彰されています。

次回、“彦根城周辺の景観重点地域の景観”をとりあげます。